鳥籠（九）

岡本綺堂

「何か紛失つたんですか。」

お照は心配さうに其處らを見廻したが、狹い店には、文房具の類から草履や淺間煙草やたばこ火消壺のたぐひまで一杯に擴がつてゐるので、彼女はそんな物を右へ左へ片寄せて見た。

精太郎が小さい折革包こ風呂敷包を持つて來たのは、お照も見て知つてゐた。彼は内へ上らない意でそれを店頭へ腰掛置いたまゝ、腰を掛けたのを無理に勸められて奥へ通つた。通る時に彼はそれを置き忘れて行つた。風呂敷包の中には田から届けて呉れと頼まれたお秀の帶の繍ひ直しが入つてゐた。そこれが第二の問題であつた。

「今貰ひに來たのは、お清さんぢやアないの。」こ、お秀が訊いた。

「さうですよ。塵紙こ石鹸を貰ひに來て……。」こ、お照が答へた。併し眞逆に彼の人ぢやアあるまいこ云ふやうな顔をしてゐた。お清こ云ふのは須藤の邸の仲働きであつた。お秀も彼女を疑ふ氣にはなれなかつた。

折革鞄の中には書類こ三十五圓の金が入つてゐた。書類は逆して重要なものでは無かつたが、卅五圓の紛失は精太郎に取つて手軽いものでも無かつた。彼は語らざるような顔をして、雨降り頻る往來を眺めてゐた。姉も茫然したやうな顔をしてゐた。

「お清さんの他には誰も來やしなかつたんでせう。」こ、お秀は又念を押した。

「何しろ、ほんの鳥渡の間なんですからね。」

お清が貰物をして歸るのを見送つてお照は奥へ鳥渡入つて來た。それから五分こ經たない中に革包は紛失してゐたのである。勿論、その前に既う紛失つてゐたのかも知れない。お清が窃こ胡麻化して行つたこ疑へば疑へないこも無かつた。

「でも、あの人に限つて……。眞逆そんなこを……。」

お秀もお照も日頃からお清の正直を信じてゐるので、何う考へても彼女に疑惑を掛けたくなかつた結局この盜難は不得要領に終つた。

「何しろ、お前眞に訴へて置く方が可いよ。」

「さうですね。」

精太郎は雨の中を急いで出やうこする時、隣の八百屋のお内儀さんが店から顔を出した。彼女は先刻から此方の紛紜を小耳に挾んでゐるらしかつた。

「あの、お店で何かお取られなすつたんですか。」

「ね、鳥渡こゝへ置いた革包が見ゑなくなりましてね。」こ、お秀が答へる。

「まあ、飛んだこつてしたね。」

「此方が不用心だから惡んですよ。」

こ、お秀は弟を睨みながら云つた。精太郎は面目が惡さうに頭を背けたが、その眼は不圖大溝の上の方に注がれた。

「あ、あすこに革包が……。」

革包は溝の中に投げ込まれてあつた。溝の岸が餘程高いので其れを拾ひ揚げるのに少しく困難であつたが、お照に傘を挿掛けて貰ひながら、精太郎は尻を端折つて石垣を除りた。濕れた革包は所有者の手に戻つた。

金は紙入に入れて、更に革包の中に入れてあつた。その中から五圓紙幣が一枚紛失した丈で他には別に損害もなかつた。何うで取る位ならば、切て金だけを全部取りさうなものであつたが、窃取者は案外に無慾であつた。併し誰の仕業だか判らなかつた。

第の風呂敷包を取りに來て、彼は革包の一見ゑなくなつたのに氣が注いた。

「この風呂敷こ一所に置いた筈ですが……。さ、松太郎は眉を寄せた。風呂敷包は自分の手に持つてゐるが、革包の方は何うしても見ゑなかつた。

「さうしたんでせうねゑ。大事な物でも入つてるやアしませんでしたか。」

「ね、。少しばかり金が入つて……。」

「まあ。」こ、お照は顔色を變へた。

お秀も出て來て驚いた。

「そんな處に置くこ云ふこさがあるものかね。お前は本當に迂闊だよ。」

實際これは精太郎の不注意であつた。何こ叱られても一言もなかつた。

「私は上らない意だもんだから、つい此處へ置いたんですよ。」

「ちやア、上る時に持つて入れば可いぢやないか。」

「それが迂闊だこ云ふんだよ。」

妹弟が押合つてゐても際限が無かつた。無いものは無いこ決つて了つた。

「誰が取つたらう。」

汽車發車時刻表
談話速記月士講院
號

鳥籠（十）

岡本綺堂

何しろ損害が意外に輕かつたと云ふことが、人々の顏の色を少しく和げた。

「まあ、其位のことなら訴へないでも可からうぢやないか。此方にも不念があるんだから、好んで科人を拵へるにも及ぶまい。」と、お秀は云ひ出した。精太郎も實は警察などへ行くのは忌であつた。彼は汚れた手足を洗つて再び内へ入つた。

お照はこれに懲て、もう些とも店番を怠ることは能なかつた。彼女はそこに整然と坐つて、眼は油斷なく店と往來とを見張つてゐたが、耳は絕わず奧の間の話聲に聞き惚れてゐた。姉と弟とは茶の間の六疊で頻に仲好く話してゐた。

奧の話聲は時々に低くなつた。さうして、お照といふ名がお秀の口から洩れて聞えた。話の筋は何だか聞き取れなかつたが、お照は思はず身を固くして呼吸を嚥んだ。革包の金を取つた疑惑が自分に懸つてゐるのではないかと、彼女は悪い方に氣を廻して恐れ危んだ。それとも精太郎と緣組の下話ではあるまいかなどと、彼女は善い方にも解釋して小さい胸を轟かした。併し彼女は一足も店を動くことは能なかつた。

隣のお内儀さんは傘を翳して何か買物にでも出るらしかつたが、この店の前で足を停めた。

「でも、まあ見付かつて可うござんしたね。ほんとうに些との間でも油斷は能ませんよ。妾の店でも過日林檎を三つ四つ盗られたんですよそりやア大抵判つちや居ますけれども……。」

「まあ、さうでしたか。」

「こゝらには悪い畜生がゐるんですからねえ。」と、話好のお内儀さんは傘を窄めて店の前に寄つて來た。「何で四五人ばかり徒黨を組んで此處らの商人店や緣日を荒して歩くんですとさ。過日妾の所へ來たのは二人でしたが……。その一人の方はね。」

奧の話に氣を取られてゐるお照は、こんな話を聞きたくも無かつた。たゞ上の空で好加減に應答をしてゐると、お內儀さんの方では調子に乘つて饒舌り始めた。

「その一人はね。ほら、今こゝへ買物に來た、お清さんの從弟なんですよ。名は盛衞とか云ふんですつてね。一人が買物をしてゐる中に、一人が窃と盗るんですとさ。麴町通や三番町の方まで行つて、商人店の代物を雜誌でも蟇口でも石鹼でも手當り次第にパクルんですとさ。お清さんはあんな正直な善い人ですけれども、何うしてあんな悪い親類が出來たんですかねえ。」

お照も此話に段々引き入れられて來た。お清は坊ちやんが仲好の須藤脩の家に長年仲働きを勤めてゐて主人にも厚く信用されてゐる女である。盛衞には其の從弟だと云ふので彼女を賴つて一昨年頃上京した。當人は新聞か牛乳の配達でもして苦學する目的であつたのを、お清から主人の博士に賴んで同家の書生に置いて貰ふことにした。地方出には似合はず、人間も中々氣が利いてゐるので、邸の內の上下にも氣受が好かつた。盛衞は今年十八で、脩と一所にこゝの家へ遊びに來ることも屢々あつた。お照も彼を熟知つてゐた。併し彼が例のパクリ仲間の一人であらうとは今まで些とも知らなかつた。

脩が不良少年でないことは、お照も信じて疑はなかつたが、其周圍にそんな悪い者が附いてゐるやうでは、坊ちやんと脩とを餘り親く交際させるのは少しく不安心だとも思つた。さうして、今の窃盗も或は盛衞の仕業ではないかとも想像した。自分は些とも氣が注かなかつたが、或は何時の間にかお清の後へ廻つて來て、革包を攫つて行つたのではないかとも考へた。

彼女は試しに訊いて見た。

「お清さんは知つてるんでせうか。」

「知らないでせう。」と、お內儀さんは顏を皺めた。「あの人も今に飛んだ迷惑をするかも知れませんよ。」

雨は小降になつて、精太郎は奧から出て來た。お秀も送つて來た。

「もうお歸りですか。」

お照は何だか殘り惜しいやうな顏をした。

「今日はこれから牛込の方へ廻りますから……いづれ又悠と來ます。」

「電車の中も氣をお注けよ。お前は[illegible]い、んやりだから。」

戀を十分に知つてゐる年頃の精太郎も、姉には小見扱ひにされてゐた。彼は忤ひもせずに笑つて歸つた。

●新刊紹介

▲染織時報（三四六）下谷大日本織物協會
▲航空界（九月）麴町有樂町帝國發明協會
▲實用新案公報（二七五）麴町帝國發明協會
▲富士研究（九月）神田旅籠町富士研究社
▲[illegible]業[illegible]（九月）芝愛宕町大日本農業獎勵會
▲茶[illegible]界（九月）靜岡追手町同發行所
▲芝居と活動（九月）日本橋芝居と活動社
▲國棋新報（四二六）芝西久保櫻川町方圓社
▲月刊樂譜（九）京橋銀座山野樂器店
▲カード樂譜（八）芝松本町共益商社

鳥籠（十一）

岡本綺堂

大溪に棲く大きな蚊も此頃は一匹も影を見せなくなつた。彌七の店で賣る蚊遣り香も何日か慢慢に灰と變つた。角屋敷の落葉が毎朝漸次に多くなつて來て、十月も既う中旬になつた。

隼雄の通つてゐる中學では高雄山の方面に遠足會を行ふ筈で、當日の日曜は試つたやうな快晴の空であつた。第一年生だけは制服を着けないでも可いことになつてゐるので、隼雄は厚袖に短い袴といふ扮裝で草鞋を穿いた。彌七は頻に世話を燒いて、草鞋の紐を結んで遣つた。彌七も同じやうに身輕に扮つて、例の通りに誘ひに來た。二人だか知らない鳥が啼いて渡べた。

「あ、佛法僧が啼いた」と、彌七が梢を仰いで云つた。

「佛法僧は高野にゐるんだ。こゝにやゐない。」と、彌七が反駁した。

「彌七は高野はかりぢやない、日光にも此山にも棲んでゐると主張した。この議論は結局何方とも型が付かなかつたが、その中に又一人が此山には狂人がゐると云ひ出した。これは確に眞實であつた。

「後の兄さんが去年の夏、臨營の瀧で、狂人の一人が附添人の眼を盜んで、ふいに行つたら、女の怖しい狂人が方へ追掛けて來さうにしたので、兄さんは喫驚して逃げたさう。」と、一人が說明した。

「狂人に追掛けられたら怖いだらう。」と、彌七は眞面目に云つた。

だから、僕は瀧の方へは行かないんだ。」と、又一人が云つた。

「いつでも狂人がゐるのが知られ。」

隼雄が斯う云つた一刹那に、背後の熊笹ががさ〳〵動いた。四人は何心なく振返つて見ると、髮の毛を長く伸ばした大男が樹の蔭からぬつと現はれた。彼の銳い眼は野獸のやうに輝いてゐた。口の中で何かぶつ〳〵云ひながら、今にも四人に飛び蒐りさうな氣勢を示した。

「それ、狂人が來た。」

四人は一度に起ち上ると、大男は獲のやうな奇怪な叫び聲をあげて追つて來た。彼等は路を揮ばずに逃げた。或者は右へ走つた。或者は左へ逃げた。樹の根に躓いて膝を傷つけた。それでも無事に頂上の業平王院の前まで辿り着いた。こゝが生徒の集合所であつた。彼は教師に遂つて、自分達が狂人に追はれたことを訴へた。

「狂人には大抵附添人があるから、無闇にそんなこは無いのであるが、狂人の一人が附添人の隙を見て其處から逃げ出して來る筈であつた。彼が何いふ意思で四人の少年を追ふたかは、それは無論判らう筈はなかつた。

彼に次いで他の二人も相前後して歸つて來たが、何時まで經つても隼雄一人は歸らなかつた。日の暮れるまで捜索に手を盡しても、彼の行方は遂に不明であつた。驚きは愈大きくなつた。

（讀者の聲）

（八木貞蔵氏）

般讀者の熱狂的歡迎を博した綺堂先生の今度の鳥籠は必らず又「妹」同樣の大騒動を得ること、存じます。「妹」の後篇は彼の悪魔の舞踊（足無外）（△人死んだ見る悪さ）（△人死んだ見る悪さ）（△人死んだ見る悪さ

籠鳥（十二）

岡本綺堂

雄は方角を誤つて逃げた。彼は笹や草の多い路を無暗に掻分けて逃げた。西も東も判らずに逃げた。およそ三四町も夢中で逃げ廻びて漸く振返るこ、おそろしい狂人の姿は既う見えなかつた。ほつと息を吐いて更に四邊を見廻すこ、彼は今まで居た所よりも餘ほど低い窪地へ転落して來たらしく思はれた。大きな杉の木立が彼の周圍を暗くして、足下には遠く水の音が聞えた。

彼は今來た路を眺め上げて少時そこに佇立てゐたが、彼の狂人がまだ其處らに彷徨いてゐるかも知れないこと云ふ恐怖があるので、彼は再び窪の路を辿つて歸る氣にはなれなかつた。彼は迂路をして集合所の方へ登ろうとした。自分の立つて居る路を眞直に降れば、頂上からまつ〳〵遠くなりさうに思はれたので、彼は路の無い藪の中を眞切つて頂上へ登ろうとした。それが一番捷路であるらしく思はれたので、彼は大膽に藪を掻き分けて進んだ。

まだ日中ではあるが、叢園といふ大木の枝や葉が日光を奪つて、迷へる人をいよ〳〵迷はすやうに見せた。名も知れない灌木の高い藪は時々に雄の小さい身體を没して了つた。地の理を些とも知らない彼は方角を失つて、唯無闇に足の向く方へ突進した。彼は横根に躓いた藤蔓に足を取られた、荊のある灌木に突き當つた。彼の手足からは血が流れた、身體からは冷い汗が一面に滲いた。

「どうしたら可からう。」

彼は實に心細くなつた、泣きたくなつた。併し迂闊大な聲を擧げたら彼の狂人が又聞附けて來るかも知れないこと危ぶまれたので、彼は救ひを呼ぶことも躊躇した。兎も角も行けう所まで行つて見ようこ、彼は勇氣を奮ひ起して又進んだ。灌木や藤蔓のたぐひが少しく圓みを解いたかと思ふよこ、今度はそこの高く伸びた草叢へ入つた。霜に枯れかつたそこの葉は無數の槍や刀を閃めかして、再び此の少年を取圍んだ。彼は後へも先へも行かれなくなつた。

斯うして行けば無事に頂上へ出られるのか、或は反對に麓へ降りて了ふのか、それすら今の彼には見當が付かなかつた。併し今更後戻りする氣にもなれないので、彼は身長よりも高い芒を左右に掻き分けながら泳ぐやうにして又進んだ。葉こ葉は搦合つて氣味の惡いほどに鳴んこ鳴つた。彼は叢たびかその尖つた葉で眼を突かれさうになつた。

蟋々云ふ音は自分の周圍ばかりでなかつた。遠い方からも何者か歩んで來るやうに同じく響いた。雄は若や自分こ一所に逃げた擧友の一人ではないこ思つた。彼は雄に切れなくなつて一聲呼んで見た。

「おゝい。」

ぜは鳴るばかりで返事はなかつた。彼は嗄つた聲を張上げて再び呼んだ。

「おゝい、おゝい。」

今度は返事が聞えた。而もそれは多くの人の聲では無かつた。おそろしい獸の唸聲であつた。雄は慘然として立竦んだ。

ぜはいよ〳〵嗚つた。唸も近づいた。彼はぜの根を押倒して進んで來る野獸の鋭い眼を視た。

「あ、熊だ」こ、彼は又顫へ上つた。熊が狼にも等しい獰惡な獸であることは、豫て學校の教師からも聞いてゐた。彼は此の大な犬の怖しさうな相好から判斷して、必然これが熊であらうこ恐れ戰慄いた。犬は眞黑な長い毛を垂れてゐて、さながら熊の見のやうにも見えた。彼はこれこ聞ふほどの勇氣はなかつた。犬は彼を脅かすやうこも能なかつた。犬は彼を脅かすことこも低く唸りながら徐に這ひ寄つて來た。雄は斯ういふ場合に燐寸を擦つて敵を防ぐことを教師に教へられてゐたが彼は生憎に燐寸を持つてゐなかつた。彼は餐に途方に暮れた。

彌七の日に照けた顏や、お照の白い顏が、車輪のやうに彼の眼の先に回轉した。

「叱ッ、叱ッ。」

犬を叱る聲にふッこ氣が注いで見返ると、何處から來たか一人の男がぜの中に立つてゐた。先刻の狂人こ驚いて熱視ること然うではなかつた。併し狂人こ違つて雄を睨んでゐた。

凄しい大男であつた。

男は默つて雄を睨んでゐた。

新刊雜誌

▲國際法外交雜誌（一）本郷龍町國際法學會▲法律新聞（〇三七）日本橋法律新聞社▲社會及國家（三三）日本橋丸屋町一匡▲軍事雜誌（九月）府下目黒里金杉正始▲早稻田中學講義（三六）牛込早稻田大▲貿易學講義（農業八）神田錦町國民貿易